

米国大学が留学プログラムに求めるもの — 短期留学受け入れ体制構築のために —

大 川 英 明

Qualities Desired by American Universities in Study Abroad Programs: Suggestions for Building a Program to Host Study Abroad Students

Hideaki OKAWA

The number of foreign students coming to Japan annually is approaching 200,000, after fulfilling in 2003 the “Plan to Accept 100,000 Foreign Students” launched by the Japanese government. The proportion of foreign students in Japan is typified by the preponderance of students from East Asian countries, approximately 92.7% (as of May 2014). This overconcentration on one region is not favorable for diversity of foreign students on Japanese campuses. In order to improve this situation, more students from Western countries could be encouraged to apply by offering Japanese/Asian studies courses instructed in English along with Japanese language courses, as studying abroad is relatively feasible economically for them, and Western universities are trying to promote globalization, global understanding, and internationalization. It may be beneficial for Japanese universities to have more knowledge about hosting such Western exchange students. This paper is an attempt to give suggestions for building such a program. It analyses questionnaire surveys meant for participants of study abroad programs of fifty American and Canadian universities to provide clarification of what these universities are interested in and concerned about in terms of the qualities and offerings of host universities.

1. はじめに

本稿は大学レベルでの1学期ないし2学期の短期留学の受け入れ体制の構築、改善の一助となるように米国・カナダの大学における留学参加者へ向けてのアンケート調査の質問項目のうち、特に留学先での学生生活に関連するものを分析し、日本の大学が受け入れ体制構築の際に何を優先すべきかを明らかにすることを目的とする。その議論の前に留学に関する基本事項について簡単に触れておきたい。

日本の教育機関における留学生の受け入れは1983年に「留学生10万人計画」が策定され、

徐々に留学生数が増加した。この計画は20年を経て、2003年に達成された。その後も増加傾向は続き、次の段階として2008年に「留学生30万人計画」が策定され、現在は留学生数が20万人に近づいてきている。

留学生が学ぶ教育機関も様々ある。学部、大学院、短期大学、高等専門学校、専修学校、準備教育課程、など多岐にわたる。国際交流や国際貢献の観点から留学生数を増やすべく各方面で努力がなされているが、基本的には次に示すような二領域でその取り組みが必要になるであろう。

(1) 学外機関との交渉（外向きの取り組み）

a. 国・地域の開発

- b. 個別の教育機関への働きかけ
- c. 専門分野別の働きかけ
- d. 個人レベルの働きかけ

(2) 学内体制の整備（内での取り組み）

- a. 教育面での改善・充実
- b. 受け入れ施設の改善・充実
- c. 支援体制の整備
- d. 奨学金・経済的支援

外向きの取り組みは海外の教育機関や個人へのアプローチになるが、取り組みの努力が必ずしも結果につながらない場合も多い。また、外国語での交渉になることが多く、学内の誰がどのように担当するかにも難しい問題がある。一大学では手におえない問題もある。外向きの取り組みを進めるためには受け入れ体制やカリキュラム等が日本留学を希望者にとって魅力があるものでなければならないと同時にアピール力が重要になる。

外向きの取り組みの前提として、当然、留学生の受け入れ機関としての魅力を高めるために受け入れ体制を充実させる必要がある。これは留学にきた学生の満足度を上げるためにも必要である。受け入れ体制が整っていないければ、留学に来る学生が一時的にいても、否定的な評価が続くと留学生数に影響することもある。この意味でも内での取り組みが重要になる。

教育機関では当然のことながらアドバイスやカウンセリング等を含む教育面での改善が肝要である。授業の仕方の違いから履修上の問題が起きる場合もあるので、それをも含めた対応措置を提供することが求められることもある。

授業以外の要素に関しても留学生の特殊事情を考慮し、様々な支援体制を整えていく必要がある。筆者は日本の大学で欧米⁽¹⁾人が大半を占める留学生別科組織で教えた経験を持つ。さらに、米国の私立大学で送り出し側としての立場にいた経験からも、受け入れシステムが十分に整っている大学に学生を送りたいという送り出し側大学としての希望を直接聞いている。しかしながら、日本国内の大学を見ると、この受け入れシステムの構築の重要性を理解してもらえないケースもある。

留学生の数を増やすべく、各教育機関、各方面で努力がなされているが、留学生の数が増えて

も、鈴木（2011）⁽²⁾が主張しているように、留学生の質が大幅に低下しないように配慮しながら、「留学生 30 万人」を目指すべきである。

2. 日本の大学における留学生の出身地域の片寄り

留学生を増やすための試みは、外部の留学生幹旋機関を利用しなければ、(1)と(2)で述べた両面において進めることになるが、本稿では特に(2)で示した内での取り組みに関する問題を中心に議論することにする。具体的には大学において、北米⁽³⁾を中心とした欧米人向け短期留学プログラムの受け入れ体制をどのように構築、改善したらいいかを明らかにするための分析と具体的な提案を行う。この種の受け入れ体制を提唱する理由を説明しておきたい。

まず、留学生の出身地域について確認しておく。日本学生支援機構(2015)は留学生の統計的な調査結果を紹介しているが、2014（平成26）年度における地域別の構成比を見ると、アジアからの留学生が91.5%で、圧倒的に多いことがわかる。2位が欧州であるが、わずか3.8%であるので、アジアに集中していることになる。2位の欧州と3位の北米を合わせても5.4%と、一桁の中盤にしかならない。

表-1 高等教育機関における出身地域別留学生数（平成26年5月1日現在）（日本学生支援機構(2015)⁽⁴⁾）

地域名	留学生数	構成比
アジア	127,399人	91.5%
欧州	5,231人	3.8%
北米	2,285人	1.6%
中東	1,366人	1.0%
アフリカ	1,209人	0.9%
中南米	1,167人	0.8%
大洋州	528人	0.4%
計	139,185人	100.0%

次に、国別の統計である表-2 日本学生支援機構(2015)を見てもアジア優勢は変わらない。逆に、欧州や北米を国別に見ると、さらに順位が下がる。表-2の表は構成比が1%以上を占める国

別のデータであるが、欧州の国は一か国も入っていない。

表-2 高等教育機関における出身国（地域）別留学生数（平成26年5月1日現在）（日本学生支援機構（2015）⁽⁵⁾）

地域名	留学生数	構成比
中国	77,792人	55.9%
韓国	13,940人	10.0%
ベトナム	11,174人	8.0%
ネパール	5,291人	3.8%
台湾	4,971人	3.6%
インドネシア	2,705人	1.9%
タイ	2,676人	1.9%
マレーシア	2,361人	1.7%
アメリカ合衆国	1,975人	1.0%

欧州で一番多いのはフランスの13位であり、その人数は833人、構成比は0.6%である。

表-1と表-2は短期留学生も含む留学生数を示しているが、短期留学生のみの統計を見ると、異なる状況が明らかになる。短期留学もアジアの国からの学生が多いことには変わらない。つまり、中国、韓国、台湾は最上位を占めている。しかしながら、そのあとは欧米諸国が比較的多数入ってくる。

表-3 高等機関における出身国（地域）別短期留学生数（平成26年5月1日現在）（構成比が1.0%以上を掲載）（日本学生支援機構（2015）⁽⁶⁾）

地域名	留学生数	構成比
中国	4,172人	32.9%
アメリカ合衆国	1,313人	10.3%
韓国	1,290人	10.1%
台湾	960人	7.5%
フランス	533人	4.2%
ドイツ	498人	3.9%
タイ	418人	3.3%
英国	306人	2.4%
ベトナム	278人	2.2%
インドネシア	250人	2.0%

オーストラリア	201人	1.6%
ブラジル	189人	1.5%
スウェーデン	141人	1.1%
カナダ	139人	1.1%
イタリア	133人	1.0%
ロシア	131人	1.0%

表-1～表-3のデータから「長期、学位留学はほとんどアジアからの学生である」ということと「短期留学の学生は東アジアが上位を占めるものの、それに欧米諸国が続く」ことがわかる。この事実はアジアからの留学生は日本の大学での学位取得を求めて日本に来る、つまり、日本の大学で学ぶことと日本の大学で取得する学位に価値を認めていることになる。一方、特に欧米の学生は日本の大学での学位を目指すケースは少ない。その理由は欧米の学生は多くの場合、日本の大学、特に学部の学位にあまり価値を認めないからである。つまり、日本、日本文化や日本語に興味はあっても、ほとんどの場合、自国の大学を卒業し、就職することを希望する⁽⁷⁾。

日本の大学にはアジアからの留学生は多いが、欧米の学生はこれに比べると少ない。欧米の留学生数を増やそうとするならば、学位留学を目指さないという現実を鑑み、欧米の場合は1学期ないし2学期の短期留学生を増やすことを目指すべきであるということになる。そして、欧米の学生がストレスなく留学できる受け入れ体制を整備すれば、その留学生数が増加する可能性はあるだろう。日本学・アジア学専攻の学生以外にクールジャパンやビジネス、国際ビジネス専攻の学生などをターゲットに開発の余地は十分ある。高等機関における留学生の専攻の調査（日本学生支援機構（2015）⁽⁸⁾）では1位が社会科学（37.0%）、2位が人文科学（22.9%）である⁽⁹⁾。

3. 改善策としての短期欧米留学生の受け入れ

留学生数を増やすためには複数の選択肢がある。その一つとして欧米の学生の短期留学を挙げることができるが、その利点はいくつか考えられる。JAFSA(2012)は6項目挙げている。その要

約を紹介しておく。

(3) JAFSA (2012)⁽¹⁰⁾における短期留学受け入れの利点

- a. 留学生は母国の大学に学籍を置いたまま留学できるため、留年などを回避できる。
- b. 留学生のニーズに合った言語（通例、英語）で対応、支援をすることで、留学、教育交流が可能となる。
- c. 受け入れ側の大学は自らの学年暦に捉われることなく留学生のニーズに合ったプログラムを開発することができる。
- d. 欧米諸国からの留学生を受け入れることにより、日本からの留学派遣学生数との不均衡を解消することが可能になる。
- e. 教室、寮などの既存の施設の効率的な活用により、受け入れ側大学は授業料外収入を見込むことができる。
- f. 短期留学生を受け入れることで受け入れ校の学生は身近に留学が感じられ、留学する動機づけとなる。

(3e)は一方向的に受け入れるだけであれば、収入が期待できるが、授業料を相殺する交換留学の場合は必ずしも期待できない。(3)以外にも様々な理由が考えられる。

- (4) a. 留学生の出身国の多様化を促進
- b. 英語を中心とした外国語による授業の促進
- c. 日本の教育機関の質的向上

表-1と表-2で提示した統計で明らかなように日本の教育機関における留学生の出身国はアジアに集中している。そこで(4a)ではキャンパスの国際化、学生の多様性を求めるならば、他の地域からの留学生を増加させるための努力が必要になることを示している。

(4b)は国際語化している英語で行われる授業の開発・促進を図ることにより英語力を養成する機会を提供することになる。また、同時に英語の授業で単位を取りたい短期留学生の受け入れ体制構築にも繋がる。

(4c)の趣旨は特に欧米の学生も満足させることができれば、日本の教育機関の改善にもつながるといふことと、そうなれば欧米の留学生の増加にも繋がることを期待できるということである。も

ちろん、日本の教育または各教育機関の特徴、独自性を保ちつつも、特に欧米の学生が留学しやすい授業、教育、受け入れ体制を構築すべきである。

日本の大学の中にも個別に欧米の大学と交換提携を結び、留学生の受け入れを始めても、授業を含む受け入れ体制の問題で留学生別科を維持できなかったケースも少なくない。つまり、欧米の大学生を十分満足させるだけの授業、受け入れ体制のノウハウを持たない機関もあり、この点でも改善の余地があると思われる。

日本で学ぶ留学生数は20万人に近づいているが、米国は世界で最も留学生を受け入れている国である。U.S. Immigration and Customs Enforcement (2015, p.2)⁽¹¹⁾によると米国の留学生数は2014年度には100万人を突破した。日本の約5倍である。米国の大学が世界的に人気がある理由は大学そのもの以外の魅力もあるであろうが、外国人にとって米国に留学すること自体に魅力やメリットがあることには間違いない。日本の教育機関も欧米人を満足させられるように改善すべきところは改善する努力を通してその教育体制の充実化を図ることができるであろう。

外国の大学との学生交換の提携ができれば、さらに国内の他大学とコンソーシアムを組み、国内での交流も考えられる。欧米ではインターネットを利用した通信教育などの教育が進んできているが、様々な学習方法を開発、提供することは大学の使命でもあり、日本も将来的には学びの機会の拡充に進むことになるだろう。そのためには特に欧米の学生が来日しやすく、学びやすい環境を整えることはその一助となるはずである。

4. 外向きの取り組み

本稿の主張は欧米からの留学生を増やしたいのであれば、欧米の学生が勉強しやすい環境を作る努力をすべきであるということである。その際、外部の留学斡旋機関を利用しない場合は、自ら留学生を集めことになる。基本的には

- i) 大学が自ら交換提携校を開発する
- ii) 特定の大学ではなく誰でも応募できるシス

テムを作ることになる。i)の方がプログラムの維持、管理の点でも利点が多い。つまり、この場合、留学希望の学生数が事前に予測しやすくなるという利点もあり、また、ある程度計画的に留学生数を増やしやすくなる。次の学期の留学生数がある程度予測できれば、教員の手配がしやすくなる。特に、非常勤講師に依頼する場合はこの予測情報は重要である。

ii)はある程度プログラムの基礎が構築でき、留学生の好評価が得られれば、応募者を受け入れてもよい⁽¹²⁾が、このような条件が整っていなければ、自由応募の学生を期待することはほぼ不可能であろう。

(1)で述べた外向きの取り組みとして具体的にどの国にアプローチをすればよいのであろうか。個々の大学で個人的に特定の海外の大学との繋がりを持つ教員などがいる場合もあるので、その関係を十分活用して提携交渉をすればよい。このような関係がない場合には、個々の大学にアプローチをするしかない。その場合、現在比較的日本に留学生を送って来ている国を候補に挙げることや比較的少ない国を候補にアプローチを試みることも可能であろう。参考のために短期留学生数の人口に対する比を紹介しておく。

欧米からの留学生が多い国は表-3の表で示した。数字は短期留学生の人数である。このリストを見ると、3位の韓国までは1,000人を超しているが、第4位の台湾以下は1,000人を切る3桁である。実際の短期留学生数は多くはないからこそ、これから開発の余地があると思われる。各国の短期留学生数を人口比で見ると表-4のようになる。単位はパーミル(%)である。

表-4 出身国(地域)別短期留学生数の人口比(平成26年5月1日現在)(構成比が1.0%以上を掲載)

地域名	留学生数	構成比	人口	人口比(%)
中国	4,172人	32.9%	1,349,335,152	0.3
アメリカ合衆国	1,313人	10.3%	310,383,948	0.4
韓国	1,290人	10.1%	48,183,584	3

台湾	960人	7.5%	23,440,278	4
フランス	533人	4.2%	62,787,427	0.8
ドイツ	498人	3.9%	82,302,465	0.6
タイ	418人	3.3%	69,122,234	0.6
英国	306人	2.4%	62,035,570	0.5
ベトナム	278人	2.2%	87,848,445	0.3
インドネシア	250人	2.0%	239,870,937	0.1
オーストラリア	201人	1.6%	22,268,384	0.9
ブラジル	189人	1.5%	194,946,470	0.01
スウェーデン	141人	1.1%	9,379,687	1.5
カナダ	139人	1.1%	34,016,593	0.4
イタリア	133人	1.0%	60,550,848	0.2
ロシア	131人	1.0%	142,958,164	0.09

台湾が4%、韓国が3%であり、最も高い値を示している。これに続くのがスウェーデンであり、1.5%ある。1.0%以上であれば短期留学で来日する学生が人口比で多いことになる。その他の多くの上位国は0.9から0.1%の間の数字を示しているが、それ以下の国もある。この差は様々な要因が関係すると思うが、おおよそ(5)に示すように様々な要因が考えられる。

- (5) a. 就学率、特に大学進学率
- b. 経済力
- c. 日本からの物理的な距離
- d. 日本からの文化的な距離、文化的な興味
- e. 日本人に対する興味
- f. 日本の経済力
- g. 奨学金の有無
- h. 日本留学の価値

多くの場合は大学外の要因なので、表-4で示された人口比の数字を見て、どの国にアプローチをしたらいいかは決められないが、少なくとも傾向を知ることができる。外的な要因を一つの大学で変えることは不可能であるが、(2)で提示したようなミクロ的な努力は各大学でもできる。それに成功している代表例が関西外国語大学留学生別科である。この受け入れプログラムは学年暦も含め、日本語学習歴がない学生でもさほどのストレスなく学習できる教育環境が整っている。このプログラムでは欧米の学生を中心に1学期に350~400人の短期留学生が在籍している。このうち約半数が2学期間留学する⁽¹³⁾。米国からの短期留学生は表-4によると1,313人であるが、この4分の

1以上が関西外国語大学に短期留学していることになる。

5. 欧米の学生の受け入れに直面する問題点

日本の大学における留学生受け入れを拡大し、留学生の多様性を確保するための一つの選択肢として、本稿では欧米の短期留学生の受け入れを提案しているが、JAFSA (2012)や鈴木 (2011)でも短期留学生の受け入れについて多少の言及がある。前者では受け入れの事務的な情報が数多く提供されている。後者は留学生教育の変遷と現況を中心に日本語教育も含め様々な情報を提供しているが、短期留学の受け入れの可能性についても議論している。鈴木 (2011)⁽¹⁴⁾ではその難しさをも指摘している。例えば、アジアの大学との交流協定の場合は受け入れ数が増えるが、欧米の場合は逆に送り出し数が増え、受け入れ数が少なくなるアンバランス状態が起こることが多い。また、鈴木 (2011)⁽¹⁵⁾は短期留学生対象の英語による留学プログラムの問題点を恒吉、他(2007)⁽¹⁶⁾の主張を援用しながら、指摘している。その要点をまとめると次のようになる。

- (6) a. 欧米の協定校から単位認定のためにも求められる（可視的に公開される）シラバスが日本人教官にとって負担が大きい。
- b. 試験やレポートさえよければ、欠席や課題の点で問題があってもそれが成績に影響しないとなると留学生のモチベーションが下がる。
- c. 英語で欧米式の授業を日本人学生が履修する場合、英語の負担も大きいので、必修でなければ、履修する学生が減っていく。
- d. 授業のための参考書籍が充実していないと、コピーを取るなど教師の負担が大きくなる。

(6a, b, d)は解決できない問題ではない。(6a)は教員の授業に対する取り組みや研修の問題である。欧米の学生のためのシラバスに基づく教育が出来れば、日本の大学教育も改善されるであろう。欧米の教育の仕方がわからないのであれば、教員のための研修の機会を設ければよい。例え

ば、夏季休暇中に米国の大学と提携し、教員を大学での授業の教え方の研修に送っている大学もある。(6a)に問題がある教員はもともと欧米の学生のための授業を担当すべきではない。よい授業評価、よいプログラム評価を受け、プログラムを継続させているのであれば、適した教員を確保する努力は必須である。

(6b)は出欠をきちんととれば済む問題であるし、課題の評価をきちんとすれば解決する。(6d)は毎学期新しいプリントを作るということであれば、負担は大きくなるが、そうでなければ、学期の最初にパケットとして準備することは可能である。また、最近は電子化したものを利用するという方法もある。多くの学生が参考資料として使わなければならない書籍が必要であれば、予算さえあれば図書館に準備しておけばよい。英語で授業を行う日本人教員が直面する問題は欧米式の授業に慣れていない、または経験がない状況で担当する場合であろうが、このような教員のための研修は必須である。

(6)の項目の中で最も難しい問題は(6c)である。英語力がある程度備わった学生が、特に英語を母語とする留学生が大半であるクラスを履修する場合、問題が発生することが多い。留学生と日本人の学生と一緒に英語で行われる授業が履修できることは好ましいが、クラスのほとんどが日本人で、その中に短期留学生がいる場合、日本人学生の英語力があまり高くなければ、英語も授業内容もそのレベルに合わせざるを得ないことも多い。そうすると、特に英語を母語とする留学生は不満を持つことになる。日本人学生の英語がなんとか母語話者について行けるレベルに達している場合に限り、混合クラスに参加できるシステムを考えるのが現実的であろう。関西外国語大学の留学生別科では日本学・アジア学の授業は基本的に留学生を最大30名までに制限し、日本側の学部生は約5名までに制限していたが、この種のプログラムではこれくらいの数が最適であるように思われる。

いずれにしても、欧米人の学生をも満足させることができる日本人教員が増えれば、日本の大学も国際的に認められる国際性を備えることに繋が

るであろう。世界の大学のランク付けが必ずしも正確性、公平性を備えているかどうかは疑問も残るが、そのランク付けの判断基準として国際性が考慮されるので、この意味でも欧米を含む多くの地域の学生をも満足させられる教育、教授能力を改善することは必要である。

6. 米国大学の短期留学後アンケート調査質問事項の分析

6.1 留学後アンケートの基本情報

短期の日本留学の基本的な情報について紹介し、分析を試みたが、それでは具体的にはどのように受け入れ体制を作ったらいいのであろうか。この問題は本稿だけで全てを分析、紹介することはできない。本稿の目的は受け入れ体制構築のための基本的な分析を行い、提案することにある。つまり、学生の送り出し側としての米国の大学が派遣先にどのようなことを望んでいるか、気にしているか、注目しているかを明らかにすることにある。その方法として学生を海外に派遣する北米の大学のうち、インターネット上にその参加者に帰国後にアンケート調査を実施するための質問事項を掲載している大学を50校選び、その質問事項を分析する⁽¹⁷⁾。留学生受け入れに関して授業や教務に関する個別論を扱う先行研究は数多く存在するが、受け入れ体制構築全体に関する研究、さらに欧米の学生に焦点を当てた研究は多くはないので、この領域で本研究はデータ分析と考察の点で貢献することができる。

留学終了者に対するアンケート調査は千差万別であり、その質問項目数、質問内容も異なる。調査した50校のアンケート調査は短い場合はA4やレターサイズ用の紙にして1ページ、最も長い場合は14ページあった⁽¹⁸⁾。後者のアンケートは記述が求められる質問もあるので、意見を全部書く場合はかなりの時間を要するものと思われる。平均は5.3ページであった。

短期留学に関して様々な質問事項が設定されている。形式としては選択式か記述式で回答する。本稿の分析として、質問内容が次のような範疇に分類できることを示しておく。

表-5 質問内容の種類

	具 体 例
a. 事実報告	食費に1か月いくらくらい使いましたか。
b. 評 価	プログラムの総合評価をして下さい。(1~5の5段階で)
c. 意 見	プログラムに参加して、どのような点がよかったですか。
d. 提案・希望	プログラムの改善のために何をしたらいいでしょうか。

6.2 質問内容の種類

調査対象としたアンケート調査は短期留学の終了後に参加者に回答してもらうものである。様々な質問事項のうちどの質問が多いかを調べると、北米の大学が交換留学に関してどのような点に注意を払っているか、注目しているかがわかる。

質問項目は大きく二つに分かれる。一つは留学前に関係する質問である。主に学生の所属大学の留学サービスに関する質問であり、出発までに提供される情報や準備についての質問である。例えば、留学の送り出しを行う部署の評価、留学準備のための情報やオリエンテーションの充実度などである。もう一つは留学開始後にかかわる質問であり、現地での授業や生活、現地の人々との交流や総合評価などが含まれる。本稿の受け入れ体制の構築という趣旨からこの二つ目の項目に限り、分析を行うことにする。

実際のアンケート調査には各質問にはそれがどのようなカテゴリーの質問かの表示はほとんどついていない。また、一つの質問に複数の異なる範疇の内容が含まれるものがあるが、この場合、内容を基準に分解し、計測した。このような事情から、以下に示す質問内容の分類方法は本稿の分析に基づくものである。

まず、様々な質問事項があるが、分析⁽¹⁹⁾により次に示すような種類に分類できることがわかる。

(7) 質問事項の種類

- A. 支援・運営体制
- B. 設備・施設

- C. 授業関連
- D. 授業外の活動・学習
- E. 現地の環境・生活
- F. 留学による影響、変化、成長
- G. 費用・送金
- H. 総合評価
- I. その他

各項目には具体的には次に見られるような種類の質問項目が含まれる。

(8) 質問事項一覧

- A. 支援・運営体制
 - a. 現地校でのオリエンテーション
 - b. 現地校の留学生の責任者
 - c. 現地校での支援、アドバイス、カウンセリング
 - d. 学習上のアドバイス
 - e. 現地校と出身校間の連携
- B. 設備・施設
 - a. 設備、学術資源（学習、研究の補助となる設備、情報、書籍、等）
 - b. レクリエーション施設
- C. 授業関連
 - a. 現地校での授業登録
 - b. 授業、教員
 - c. 現地語学習の授業
 - d. 個々の授業の評価
 - e. 授業外の外国語使用
 - f. インターンシップ、奉仕学習
 - g. 体験学習、見学、訪問、研修旅行
- D. 授業外の活動・学習
 - a. 社会的・文化的経験、訪問国の文化理解
 - b. 現地の人々との交流
 - c. 課外活動
- E. 現地の環境・生活
 - a. 土地柄、地域情報
 - b. 差別、偏見
 - c. 宿泊施設
 - d. 食事
 - e. 個人での旅行
 - f. 健康、治安
 - g. 健康保険
 - h. 電話

- F. 留学による影響、変化、成長
 - a. 文化理解、世界情勢理解、自国理解
 - b. 学習効果、学習意欲向上
 - c. 目標、専攻、進路（就職）の決定・変更
 - d. 文化的適応、環境適応
 - e. 個人の成長、自己分析・自己理解、努力
- G. 費用・送金
 - a. 料金、予算、費用
 - b. 送金方法、支払方法
- H. 総合評価
 - a. 総合評価
 - b. 参加のメリット
- I. その他
 - a. 人間関係（留学生間）
 - b. 留学持って行くべき（だった）もの・持て来る必要ない（なかった）もの
 - c. その他

本稿では紙幅の関係で各項目の具体的な質問を紹介することはできない。この中で(8F)の項目について説明を加えておく。この種のアンケートは一部には留学した学生に留学を振り返り、その効果を自覚、発見させるために実施する。この範疇の質問はプログラム改善には必ずしも直結しないが、留学紹介や留学促進のための資料としての価値がある。

6.3 質問内容の分析

質問項目の種類は明らかになったが、これだけではどのような項目に注目しているかはわからない。それを明らかにする手段として、アンケート調査における各質問項目に対し、1)どれくらいの大学が質問を設けているか、また、2)各質問項目には具体的に質問がいくつあったかを調査してみた。それぞれ、数が多ければ興味、注目の度合いが高いということになるであろう。

(8)で示した各項目に一つでも質問を設定した大学数を計測し、その大学数が50校中の何%であるかを求めた。紙幅の関係により、ここでは第10位までの項目を紹介する。

表-6 項目を選んだ大学数(50校中)の率

	項目	%
1位	総合評価	94
2位	宿泊施設	86
3位	授業、教員	74
4位	現地校での支援、アドバイス、 カウンセリング	62
5位	現地校でのオリエンテーション	60
6位	現地の人々との交流	58
7位	体験学習、見学、訪問、研修旅行	48
8位	健康、治安	48
9位	目標、専攻、進路(就職)の決定・変更	46
10位	設備、学術資源(学習、研究の補助となる設備、情報、書籍、等)	42
10位	現地語学習の授業	42
10位	料金、予算、費用	42

総合評価の質問は当然のことながら、ほとんどの大学が設けている。個々の詳しい質問があるから、総合評価の質問がなくてもいいというわけではない。個々の質問に否定的な評価をしていても、全体としては満足している、参加してよかったと思うこともあるからである。個々の質問事項の総和が総合評価にはならない。

表-6はアンケート項目を選んだ大学数に基づく結果であるが、次に各範疇の質問の合計が総質問数中の率を求めたものが次の表-7である。

表-7 総質問数(1892件)中の率

	項目	%
1位	授業、教員	13.2
2位	総合評価	11.6
3位	宿泊施設	9.1
4位	現地の人々との交流	9.0
5位	個々の授業の評価	4.8
6位	文化理解、世界情勢理解、自国理解	4.3
7位	料金、予算、費用	3.9
8位	現地校での支援、アドバイス、 カウンセリング	3.7

9位	設備、学術資源(学習、研究の補助となる設備、情報、書籍、等)	3.6
10位	体験学習、見学、訪問、研修旅行	3.5

6.4 質問事項上位3項目：「授業・教員」「総合評価」「宿泊施設」

表-6と表-7を比較すると、上位3位までの質問項目は順位は異なるものの、同じ項目であることがわかる。つまり「授業、教員」、「総合評価」、「宿泊施設」の3項目である。「総合評価」は上で言及した通り、重要な項目である。「授業、教員」も教育や単位取得にかかわる問題であり、学生を送り出す大学としては当然最大の関心を払う。受け入れ校としては教育の質の確保を保つことは最重要課題としなければならないが、特に英語で行う授業は米国の授業に対して要求するレベルや質を考える必要があることを指摘したい。

(9) 短期留学生のための授業運営考慮事項

- a. クラスサイズ
- b. 学生に対する接し方
- c. 授業の仕方
- d. 評価の仕方
- e. 参考資料・情報検索

これらのごく一般的な内容であり、日本における授業にも言えることであるが、北米からの短期留学生が大半であるクラスを担当する場合は、一般的にその内容についてのレベルを上げる必要があるだろう。どこにボーダーラインがあるかを明示的に規定することは困難である。それは個々の授業のテーマや教授法により異なるということがあり、また、これは程度の問題であるからである。つまり、(9)で示した範疇で留学生による評価が低めであっても、授業は成り立つ。しかし、留学生数を維持、拡大したい場合には、または、他に競争相手がいる場合には、自分の大学を選んでもらえるか否かの問題になる。米国の私立のリベラル・アーツの大学の学生は州立大学と比較して教育の質に対する要求度が高いが、それを考慮し、次の提案をする⁽²⁰⁾。

(10) 短期留学生のためのクラス考慮事項の説明

- a. クラスサイズ

日本学の授業は最大40名まで。グループ

ディスカッションやグループワーク、プロジェクトをする場合、4人か5人のグループを作りやすい。日本人を履修させる場合は、TOEFLは500点以上で、5名まで。

日本語の会話と読み書き授業を分ける場合は日本語授業のレベルにもよるが、前者が12名ほど、後者が18名ほど（小テスト、宿題、試験、発言、作文を比較的頻繁に行うという前提）

b. 学生に対する接し方

留学生とのラポール作りが重要。留学生による授業評価（プログラム内の全教員）を数多く読んだ経験から、ラポール作りに優れている教員の方が留学生による授業評価がよいという顕著な傾向があった。

c. 授業の仕方

講義内容が学生に合っており、話し自体に魅力がある場合は講義中心の授業もあるが、一般的に学生参加、映像利用、発表、プロジェクトなどを入れ、興味を持たせる工夫が必要。（英語で説明、指導、アドバイスができることが前提）

d. 成績評価の仕方

成績の付け方を学期の最初に説明することは必須。学期中のレポートも含めて、成績について聞いてくることもあるので、理由を説明し納得させる必要がある。かなり、自己主張してくる学生もいる。

e. 参考資料・情報検索

これは設備・施設に関係する問題であるが、授業のためにレポートを書いたり、プロジェクトをさせたりする場合はそのための資料、特に図書が揃っていることが前提になる。

海外での教授経験がない場合は実際にどのようにしたらいいか感覚的にもわかりづらいので、可能であれば、例えば、学術交換提携校があれば、実際に1学期ないし2学期間、現地で教える経験を積むとともに、教育学専門の教員に教え方を学ぶワークショップなどを開催してもらうということで研修を計画してもよい。

北米からの短期留学生の一般傾向として次のような分析を試してみた。

(11) 北米の短期留学生の一般傾向

- a. 私立の特にリベラル・アーツ大学の学生は州立大学の学生より教育に対する要求度が高い。
- b. クラス中に留学生と日本人の学生がいる場合、留学生の率が高いほど留学生は自国の教育方法で授業・教員評価をするようになる。逆に留学生が少数派である場合は現地の体制を受け入れ、それに適応しようとするベクトルが大きくなる傾向がある。
- c. 日本語のレベルが高いほど、日本のシステムを受け入れ、適応しようとする傾向が強くなる。

表-6と表-7の項目の上位に「宿泊施設」が入っている。短期留学という特性や日本語を1学期しか勉強していないような学生、またはそのようなレベルの学生も来ることを考えると、言葉にも文化にも慣れていない学生のために細心の注意を払うことは当然である。北米の大学では多くの学生が学生寮に住み、学生寮がキャンパスまたはキャンパスに比較的近い場所に位置するケースが多いという点でも日本の大学とは大きく異なるが、少数ではあるが日本の大学には北米的な寮を持つ大学もある。北米の学生にとってはアパートなどに住むよりは暮らしやすいであろう。それでも、北米の大学とは設備の充実度は異なる。北米の大学の寮には食堂、娯楽施設（テレビ、卓球台、ビリヤード台、トレーニングルーム、等）、コンピューター設備、などがある場合も多い。また、キャンパスのスポーツ設備も充実しているところが多い。日本の大学では同じような設備を揃えることは難しいであろうし、留学生は自国とは異なる文化に暮らしているということは理解しているので、必ずしも北米と同じレベルにする必要はないが、少なくともストレスの少ない宿泊環境⁽²¹⁾を整えることを考えるべきである。

6.5 「現地の人々との交流」と「現地校での支援、アドバイス、カウンセリング」

表-6と表-7の表における4位と6位に「現地の人々との交流」が入っている。人と人との交流を重視していることがわかる。筆者が米国の大学で日本の大学と1学期の短期留学のプログラムを計画、実施した時も授業の質や内容以外にこの人的な交流のための計画があるのかを副学長に確かめられた。受け入れ校としてはこの要素も考慮に入れ、受け入れ体制を整備すべきであろう。

米国でも大学がグローバル化、国際化、異文化理解を推し進めるべく国際交流を充実させようとしている大学や州もある。北米の学生が留学しやすい受け入れ体制が構築できれば、日本学、アジア研究が専攻ではなく、また、日本語学習歴が浅い学生をも留学に呼ぶことができるであろう。欧米人を多く受け入れている実績のある日本の大学では留学生の専攻が日本学、アジア学が多いことは確かであるが、ビジネス、国際ビジネス専攻の学生もそれに次ぐほど多い。理工系の学生も少数であるが、常に存在する。日本の大学の努力次第でもう少し欧米の学生を増やすことは可能である。

表-6で4位、表-7で8位に入ったのが「現地校での支援、アドバイス、カウンセリング」である。留学生の数が多くなると、比例して問題を起こす学生や問題を抱える学生が出てくる。教務関係のアドバイスは教員が担当することになるが、生活面での支援などは事務が担当するという分担が好ましい。欧米の留学生の授業を多く担当する教員は授業の負担が重くなるので、事務職員との協力・仕事の分担が必要になる。留学生担当事務は他の部署と同じような業務形態に縛られているとなかなかうまくいかない。事務の仕事も横田・白土(2004)⁽²²⁾が示すように言語、文化、生活に慣れていない短期留学生を扱う仕事はオリエンテーションから危機管理まで多岐にわたる。より効率的なプログラム運営は教員と協力しながら、交換提携の調査、交渉、計画も含めて事務職員がイニシアチブを執ってできる仕事を担当するというような柔軟な工夫も必要である。

留学生、特に欧米の短期留学生を受け入れたいのであれば、留学生を扱う事務組織の確立が重要である。日本式のプログラム運営をしていたので

は機能しないことも多い。つまり、欧米の学生との対応や提携校との対応をしなければならないので、欧米流の仕事の仕方に合わせざるを得ないこともある。特に留学生担当の部署は学内的な理解も含め、特別な組織運営が必要である。例えば、問題に対し即決しなければならないことも多いが、欧米の大学の場合、組織の長に比較的大きな決定権があり、即決しなければならない時にはそうする権限が与えられている場合が多い。日本の受け入れプログラムでもそのような対応が求められることがある。

留学生関連の事務の仕事は外国語(英語)が使える、国際的に通用する対応が求められ、日本人の学生にはあまり必要がない生活支援、学習支援や文化的な適応の手助けをする必要がある。この意味で専門性が必要な仕事ということになる。日本の大学内の「国際化」を進めるならば、この部署から始めなければならない。この専門性に関して、JAFSA(2012)は日米の大学での相違を説明している。

(12) 日米の大学の留学担当者の位置づけの違い (JAFSA(2012)⁽²³⁾)

米国の大学において留学生担当者は、制度上 International Student Adviser という専門職としての役割が確立しており、ほとんどの場合 Ph.D. の取得者であり、アメリカ入国ビザ発給のための申請書類の発行の権限を持つなど、学内的な職種ではなく、対外的にも認知された職種として存在している。一方、日本のように個人よりも組織に裁量権がある社会風土にあっては「留学生担当者」は学内の「組織の一部」であり、「組織の一員」に過ぎず、専門職としての役割はなかなか根付きにくいのが実情である。

日本の大学では多くの職員が部署を異動することが一般的であるが、留学生を担当の部署では特に外国語運用能力とともに海外の大学との交渉や情報交換能力が必要になる。より専門知識や能力が必要になるスペシャリストが必要とされる。本稿で扱っている留学生の受け入れ体制を整えたいということであれば、この仕事に対する大学の位置づけや異動などに関する人事面での対応と考

方、更に教員との役割分担、協力体制の構築の改善を考えるべきであろう。

7. まとめ

日本の大学の国際評価が下がり続けている原因の一つとして教育や組織としての「国際化」の遅れがあるという前提のもと、本稿では米国を中心とした短期留学生の受け入れ組織の構築を図る過程において、大学全体の改革の一助となる可能性を主張した。また、その具体的、かつ基礎的な研究として、北米の大学が留学受け入れ校に何を期待しているかを明らかにすることにより受け入れ校がこれから何に注意を払えばいいかを示唆した。そのための一つの条件として、北米を中心とした欧米人の教育に適した教員、授業形態の重要性とともに、このような留学生に対応できる教員、事務組織の構築の重要性を主張した。

欧米人との接触や情熱を持つ少数の教員や事務方を中心に受け入れ組織構築に向けての努力を重ねるうちに経験から学ぶこともできる。そのためのキーワードは人材と組織の「国際性」と「迅速性」である。企業でも海外の交渉相手に情報や提案を提示された時に日本式に「本社に帰って対応を検討させていただきます」では進まないこともある。

例えば、2011年3月11日（金）に東日本大震災が起こったが、筆者の当時の任務校ではその直後の原子力発電所の事故により留学生がすぐに反応し帰国し始めた。この時期は春学期の中間試験期間の直前であったが、約400名いた留学生は次々に帰国を開始するという状況の中⁽²⁴⁾、受け入れプログラム内で早急に単位をどのように出すか、その後の対応について2、3日で決定し、留学生および200校を越す出身大学に連絡をしなければならなかった。この時に諸会議を開いて、承認、周知する暇はなかったのである。

本稿では(7)~(8)と表-6~表-7で短期留学に学生を送る米国大学の留学後アンケートの質問事項の分析結果を示した。この結果から特に送り出しの大学が受け入れ校にどのようなことを期待するか、関心を寄せているかがわかる。これを受け

入れ体制の構築の指針とすることができる。さらに、表-6と表-7で示した項目は特に重要な要素であるので、大学の特色と留学生の特色やニーズを考慮しながら、整備することを提案した。

*匿名の査読者に改善点を指摘していただいたことに感謝する。

注

- (1) 「欧米」は後出の引用資料では地域の名称として用いられているが、本稿ではそれ以外は米国、カナダの北米と欧州とオーストラリア、ニュージーランドを示すことにする。
- (2) 鈴木洋子、『日本における外国人留学生と留学生教育』、pp.246-247、春風社、2011
- (3) 後出の「日本学生支援機構（JASSO）」の引用資料では「北米」を米国とカナダに限定しており、メキシコ以南は「中南米」に区分している。本稿における分析や提案は米国大学に基づくところが大きい、米国とカナダの差は他の地域と比べて相対的に小さいと思われるので、北米として一括して扱うことにする。
- (4) 日本学生支援機構、「平成26年度外国人留学生在籍状況調査結果」より引用、p.13、http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data14.pdf、2015年8月14日閲覧
- (5) 日本学生支援機構、「平成26年度外国人留学生在籍状況調査結果」より引用、p.14、http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data14.pdf、2015年8月14日閲覧
- (6) 日本学生支援機構、「平成26年度外国人留学生在籍状況調査結果」より引用、p.15、http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data14.pdf、2015年8月14日閲覧

- (7) 筆者が米国の大学にいた時に1学期間の日本留学を企画、運営したことがある。毎年20名ほど留学させたり、自ら付添いの教員として日本の大学に滞在したが、約10年の間に日本で就職した学生は一人もいなかった。
- (8) 日本学生支援機構、「平成26年度外国人留学生在籍状況調査結果」、p.17、http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data14.pdf、2015年8月14日閲覧
- (9) この統計はアジアからの学生が大半である留学生を含むデータであり、欧米の短期留学生のみの統計ではないが、筆者がかかわった欧米の大学生中心の受け入れプログラムでも日本研究・アジア研究を中心とした人文科学とビジネス専攻を中心とした社会科学が恒常的に上位を占めていた。
- (10) JAFSA プロジェクト、『留学生受入れの手引き』より引用、pp.116-117、「増補改訂版留学生受入れの手引き」かんぽう、2012
- (11) U.S. Immigration and Customs Enforcement, Student and Exchange Visitor Information System General Summary Quarterly Review February 2015, p.2, <http://www.ice.gov/sites/default/files/documents/Document/2015/by-the-numbers.pdf>、2015年8月14日閲覧
- (12) 欧米の留学生を中心としたプログラムの成功例である関西外国語大学では9割以上が提携交換留学生で、残りが自由応募の学生であるが、北米では定評を得ているプログラムであるので、自由応募の学生は成績がGPA3.0をはるかに上回る学生だけを受け入れている。
- (13) 関西外国語大学留学生別科の基本的な情報を多少紹介しておく。このプログラムではクラスサイズは大きくならないように制限している（日本語会話は14人、日本語読み書き、約18～20人、日本学・アジア学科目は30人（+日本人学生5人）まで）。日本語教員も専任が大半で、非常勤講師も含め全員英語で学習上の指導もできる。日本学・アジア学の教員はほとんどが英語圏出身であり、授業は全て英語で行われている。また、日本学・アジア学の授業は1学期に40以上開講している。学年暦は米国のセメスター制を採用している。
- (14) 鈴木洋子、『日本における外国人留学生と留学生教育』、p.257、春風社、2011
- (15) 鈴木洋子、『日本における外国人留学生と留学生教育』、pp.271-273、春風社、2011より要約引用
- (16) 恒吉遼子、近藤安月子、丸山千歌、「国際化戦略としての英語」、『東京大学大学院教育学研究科紀要－東京大学短期交換留学プログラムの事例－』第47巻、東京大学大学院教育学研究科、2007より要約引用
- (17) 分析のためにまとまった数の大学から留学参加者へのアンケート調査票（質問）を入手することは困難なので、今回はインターネットで公開されているアンケートの分析を行った。留学の参加者の学年、専攻、行先などに関する説明はほとんどなく、同じアンケート調査票が共通に使われているものと思われる。調査対象とした50校は米国のYahoo!において「study abroad questionnaire」で検索し、アンケート調査自体のリストが大きく途切れたのが50校近くであったので、そのうち対象外の地域を除き50校を選んだ。この50校のうち、2校が米国の短大（Georgia Perimeter College と Saddleback College）であり、1校がカナダの4年制大学（Concordia University）である。その他は米国の4年制大学である。
- (18) アンケートは多くの場合、マイクロソフトワードかPDFで作成されているので、ページ数が明らかである。50校中3校がウェブ上でのアンケート回答をすることになっているので、ページ数が明白ではなかった。この場合、便宜的にアンケートをコピーし、マイクロソフトワードにペーストした場合のページ数を採用した。
- (19) 6.2項第2段落の通り、留学前の所属大学におけるオリエンテーション、手続きや留学生の受け入れに関係のない質問以外は全て分析

対象とした。

- (20) この提案は日米の大学で欧米の学生や交換留学生の授業を担当し、交流プログラムの運営の現場で30年間携わった経験を中心にまとめたものである。
- (21) 米国の大学のようにキャンパス内、又は近くの比較的静かな環境に宿舎があればいいが、民間のアパートや宿泊施設を利用する場合は周辺環境、キャンパスへの距離やアクセスに問題がない場所を選択する必要がある。また、寮のようなところで食事が出ることが理想であるが、このサービスがないところでは食材の買い物がしやすい店が近所にある必要

がある。また、ごみ出しの規則などは留学生は負担を感じることが多い。

- (22) 横田雅弘、白土悟、『留学生アドバイジングー学習・生活・心理をいかに支援するか』、ナカニシヤ出版、2004
- (23) JAFSA プロジェクトより引用、『留学生受入れの手引き』、pp.24-25、「増補改訂版留学生受入れの手引き」かんぼう、2012
- (24) 大学は大阪府内にあったが、震災、原発事故のあと、約400名の留学生のうち、提携大学や家族の強い意向で約200名が帰国した。数週間後にそのうち約100名が戻ってきた。

参考文献（和文）

1. JAFSA、「増補改訂版留学生受入れの手引き」、プロジェクト、『留学生受入れの手引き』、かんぼう、2012
2. 日本学生支援機構、「平成26年度外国人留学生在籍状況調査結果」、http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data14.pdf（2015年8月14日閲覧）、2015
3. 鈴木洋子、『日本における外国人留学生と留学生教育』、春風社、2011
4. 恒吉遼子、近藤安月子、丸山千歌、「国際化戦略としての英語」、『東京大学大学院教育学研究科紀要－東京大学短期交換留学プログラムの事例－』第47巻、東京大学大学院教育学研究科、2007
5. 横田雅弘、白土悟、『留学生アドバイジングー学習・生活・心理をいかに支援するか』、ナカニシヤ出版、2004

参考文献（欧文）

1. U.S. Immigration and Customs Enforcement, *Student and Exchange Visitor Information System General Summary Quarterly Review February 2015*
<http://www.ice.gov/sites/default/files/documents/Document/2015/by-the-numbers.pdf>
（2015年8月14日閲覧）、2015

調査大学名とアンケートの URL (閲覧日: 2015 年 8 月 14 日)

Alvernia University (Reading, PA)	http://www.alvernia.edu/student-life/educational-planning/study-abroad/students/AssessmentAlverniaStudyAbroad.pdf	depts.gpc.edu/~gpcglobe/Resources/Program%20evaluation.doc
Appalachian State University	http://international.appstate.edu/sites/international.appstate.edu/files/505_FacultyLed_ProgramEvaluationForm_SRC7-16-15.pdf	Hamilton College http://www.hamilton.edu/documents//dean-of-students/SA_Evaluation.pdf
Austin Peay State University	http://www.apsu.edu/sites/apsu.edu/files/internationaled/APSU_STUDY_ABROAD_PROGRAM_EVALUATION.pdf	Illinois College http://www.ic.edu/exploreforms [Press: Debriefing form]
California State University East Bay	http://www2.csueastbay.edu/cie/files/pdf/Evaluation_BilateralExchange.pdf	Indiana University - Purdue University Fort Wayne http://www.ipfw.edu/dotAsset/362bad3f-5672-4d68-8a2f-19ce2df38726.pdf
Carroll College	http://www.carroll.edu/files/files/academics/international/CCEA-Semester-Study-Abroad-Evaluation.pdf	Jackson College http://www.jccmi.edu/futurestudents/international/docs/evaluation.pdf
Central College	http://www.cornellcollege.edu/off-campus-studies/Assessment/CentralEval.pdf	Keystone College http://www.keystone.edu/about_us/departments_and_offices/forms/centerforgloballearning/study_abroad/StudyAbroadProgramEvaluation.pdf
Clark University	http://www.clarku.edu/offices/studyabroad/pdfs/Clark%20Stu%20Evaluation.doc	Middlebury College www.middlebury.edu/media/view/103461/original
Concordia University	http://www.cui.edu/uploadedFiles/AcademicPrograms/GlobalPrograms/Study-Abroad/Study-Abroad-Evaluation-Form.pdf	Middle Tennessee State University http://mtsu.studioabroad.com/index.cfm?FuseAction=Abroad.ViewLink&Parent_ID=0&Link_ID=5AC4B296-26B9-58D3-F53045E0BE4AE752
DeSales University	http://web1.desales.edu/assets/desales/studyabroad/StudyAbroadEvaluation.pdf	Millersville University http://www.millersville.edu/globaled/surveys/eval/
Eastern Illinois University	https://castle.eiu.edu/~edabroad/forms/students/StudyAbroadEvaluation2.pdf	North Carolina Central University http://www.nccu.edu/formdocs/proxy.cfm?file_id=338
Framingham State University	https://www.framingham.edu/Assets/uploads/the-fsu-difference/study-abroad/_documents/framingham-evaluation-form.pdf	Northwestern University http://www.northwestern.edu/studyabroad/documents/Program_Evaluation.doc
Georgia Perimeter College		Pomona College www.pomona.edu/.../study-abroad/files/evaluation.doc

- Rice University
<http://abroad.rice.edu/content.aspx?id=2147483710>
- Saddleback College
www.saddleback.edu/.../la/documents/SAPStudentEvaluation.doc
- Saint Mary's College, Notre Dame, IN
https://cwil.saintmarys.edu/files/cwil/old-content/php/intercultural.learning/documents/abroadsurv__2005_final-long.pdf
- Salisbury College
www.salisbury.edu/intled/StudyAbroad/Resources/evaluation.doc
- San Francisco State University, Faculty-Led Study Abroad Program
<http://oip.sfsu.edu/sites/sites7.sfsu.edu.oip/files/facultyleader/studenteval.pdf>
- Santa Clara University
<http://www.scu.edu/studyabroad/students/upload/evaluation.pdf>
- Southern Illinois University
www.siu.edu/studyabroad/pdf/Returnee_Evaluation_Form.pdf
- St. John Fisher College
www.sjfc.edu/dotAsset/641787.pdf
- SUNY College of Environmental Science and Forestry
<http://www.esf.edu/studyabroad/documents/SAPProgramEvaluation.pdf>
- Tulane University
<http://global.tulane.edu/oiss/studyabroad/forms/evaluation.pdf>
- University of Arkansas at Little Rock
<http://ualr.edu/studyabroad/eval/>
- University of the District of Columbia
<http://www.udc.edu/docs/international/StudyAbroadEvaluation.pdf>
- University of Houston
http://www.uh.edu/learningabroad/_forms/EvaluationForm.pdf
- University of Houston-Victoria
<http://www.uhv.edu/media/uhv/contentassets/documents/sab/EvaluationforStudyAbroadProgram.pdf>
- University of Missouri, International Center
<http://international.missouri.edu/forms/forms/sa-program-eval.pdf>
- University of Missouri Short-term On-site Evaluation, International Center
<https://international.missouri.edu/forms/forms/flp-site-evaluation.pdf>
- University of Missouri-St.Louis, Study Abroad Office
<http://studyabroad.umsl.edu/abroad/docs/eval.pdf>
- University of North Carolina - Greensboro
<http://www.uncg.edu/ipg/studyabroad/nafsaorientationworkshop/studyabroadevaluation.pdf>
- University of Puget Sound
http://www.pugetsound.edu/files/resources/2410_Study%20Abroad%20Questionnaire.pdf
- University of Saint Joseph
http://ww2.usj.edu/PDF/study_abroad/study-abroad-evaluation.pdf
- University of Texas at Austin
world.utexas.edu/io/forms/abroad/re_entry_evaluation.doc
- Washington College
<http://www.washcoll.edu/live/files/666-sareturnevaluationpdf>
- West Texas A&M University
<http://www.wtamu.edu/webres/File/Academics/Study%20Abroad/Program%20Evaluation.pdf>
- Western Michigan University
<http://www.wmich.edu/sites/default/files/attachments/u211/2014/SA%20Post-program%20Evaluation%20Form%202014-15.pdf>
- Wheaton College
<http://wheatoncollege.edu/global/2014/02/10/study-program-evaluation-form/>
- Wheeling Jesuit University

[http://www.wju.edu/academics/studyabroad/
evalform.pdf](http://www.wju.edu/academics/studyabroad/evalform.pdf)

Whitman College

[http://www.whitman.edu/Documents/
Offices/OCS/OCS%20Evaluation%20and%20
Survey%2014.doc](http://www.whitman.edu/Documents/Offices/OCS/OCS%20Evaluation%20and%20Survey%2014.doc)

(ookawa.hideaki@nihon-u.ac.jp)